The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

道元禅師における伽藍建立の意義

西澤　まゆみ

道元禅師は『正法眼蔵随聞記』巻三（以下、『随聞記』と略す。巻数は長円寺本の巻数）において「当世の人、多、造像起塔等の事を仏法興隆と思へり。又、非也。」と、世間の人は、仏像を造り寺院を建立することが仏法が盛んなことであると思っていることを間違いであるとし、「只、草庵樹下にても、法門の一句をも思量し、一時の坐禅をも行ぜんこそ、実の仏法興隆にてあれ。」と、草葺きの小さな家や、樹下においても、仏の教えの一言でも考え、僅かな時間でも坐禅をすることこそが、本当に仏法が盛んなことである、と示している。

これは嘉禎元年（一二三五）頃の説示であると考えられるが、寛元二年（一二四四）に示衆された『正法眼蔵』「発無上心」巻では「ただまさに、造像・起塔等は発菩提心なりと決定信解すべきなり。」と、仏像を造り、寺院を建立する行為はまさに発菩提心であると示している。

これら二つの説示について、伽藍を不要とする考えから必要不可欠とする立場へ変化したという説[1]、伽藍の要不要に対する立場は情勢による変化であり流動的であるとする説[2]、「造像起塔」という言葉を全く別のテーマに用いているため矛盾や変化はないとする説[3]、伽藍建立は道元禅師の本意ではないとすると思われる説[4]など、諸説がある。

本論は諸説ある中、伊藤秀憲氏の説を受けつつ、『正法眼蔵』『随聞記』等の説示を年代順に考察し、道元禅師における伽藍観の変化の有無を探るものである。（本論中の「造像・起塔等」の語は建造物全般として扱い、ここでは「寺院・伽藍」の意として扱うこととする。）

嘉禄二年（一二二五）『宝慶記』では「不可在当風之処而坐禅。」「今称禅院寺院図様儀式、皆是祖師之親訓、正嫡之直伝也。」と如浄から坐禅を行う環境を整えることが慈誨され、寺院の構造は、祖師からの言い伝えであり、正しい伝承であることが示されている。

寛喜三年（一二三一）『辦道話』では「叢林の規範、および寺院の格式、いましめすにいとまあらず」と清規・伽藍建立

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

について示衆する準備のあることを示している。

嘉禎元年～二年頃（一二三五～一二三六）、『随聞記』巻三では、「僧正云、我等後代の亡失、不可思之。西天の祇薗精舎も、礎計留れり。しかれども、寺院建立の功徳、不可失。又、当時、一年半年の行道、其の功、莫大なるべし。今思之、寺院の建立、実に一期の大事なれば、未来際をも兼て、無難様にとこそ可思けれども、さる心中にも、如是道理を被存心のたけ、実可思之。」と伽藍建立の功徳について栄西禅師の言葉を寄せ、伽藍建立への思い以上に、行持を重んじており、また道元禅師にとって伽藍建立は一生涯の大事業であると筆録されている。また『随聞記』では先述に加え、勧進し興聖寺を建立すること、そのこと自体が仏法が興隆することとはならないが、在家に仏法との縁を結ばせることになる、つまり伽藍建立が発心のきっかけになると示している。

嘉禎元年（一二三五）『宇治観音導利院僧堂勧進之疏』では「寺院是諸仏道場也。神丹仏寺者、移天竺僧院、日本精舎亦当学彼。（中略）道元入宋帰朝以来、一寺草創願志、雖年久月深、無衣盂応柱。而今獲勝地一所。（中略）未叢林、欲瘠此所於甲刹。寺院之最要仏殿法堂僧堂也。仏殿有本、法堂未。僧堂最切要也、今為建枴。」と伽藍建立を願う書状を記している。

仁治三年（一二四二）『正法眼蔵』「行持」巻（下）では「修練ありて堂閣なきは、古仏の道場なり（中略）末世の愚人、いたづらに堂閣の結構につかるることなかれ、仏祖いまだ堂閣をねがはず。自己の眼目いまだあきらめず、いたづらに殿堂・精藍を結構する、またく諸仏に仏宇を供養せんとにはあらず、おのれが名利の窟宅とせんがためなり。」と示す。これは、潙山霊祐の伽藍を持たない時期における行持の持続を讃えた文言である。つまり、古仏の道場とは伽藍が整っているかどうかに関わらず、行持が現成しているかどうかであると示し、名利のために伽藍建立をなす人を戒めている。「行持」巻のこの説示より、道元禅師は伽藍不要の立場を唱えたとする説（注2、菅原氏論文参照）があるが、ここでは潙山の行持が堅固であることを述べるに過ぎず、修行が失われている伽藍の存在を否定しているに留まっている。

寛元元年（一二四三）「坐禅儀」巻では「坐禅は静処よろし。坐蓐あつくしくべし。風煙をいらしむることなかれ、雨露をもらしむることなかれ、容身の地を護持すべし。（中略）昼夜くらからざれ。冬暖夏涼をその術とせり。」と坐禅を行う環境を重んじている。

寛元二年（一二四四）「発無上心」巻では「而今の造塔・造仏等は、まさしくこれ発菩提心なり、（中略）造像・起塔、すなはち有為にあらず、無為の発菩提心なり、無為・無漏の功徳なり。ただまさに、造像・起塔等は発菩提心なり、」と

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

伽藍建立は発心のきっかけになることを説いている。この巻では、造像・起塔等だけではなく、読経・念仏、尋師聞法、南無仏と称えること等が発心の因縁となると説かれている。従来この巻における造塔・起塔等の語句をめぐり、杉尾守（玄有）氏は、「大仏寺建立を成就せんがためには「発無上心」における如き説き方も必要であった」とし、袴谷憲昭氏は「大仏寺建立に合わせた単なる叱咤激励の文章」と解釈している。しかし、中心テーマは菩提心をおこすべきことであり、先述したように造像起塔以外に多くの因縁が挙げられている。これは『随聞記』巻三の記述と一貫しており、両氏のように造像起塔という語句のみを取りあげ、思想的変化があったと結論付けることは出来ないのではないかと考える。

寛元四年（一二四六）『知事清規』では「知事等不可事豊屋作高堂大観例。況乎仏祖之児孫、誰事豊屋、経営于朱楼玉殿者乎。（中略）予二十余年、歴観両朝、或老年、或壮齢、不惜寸陰経営土木之者、多唐労一世、周章失度。」と必要以上の伽藍建立を否定し、伽藍の大小ではなく、修行がなされているかどうかを重要視している。

建長三年（一二五一）『永平広録』第六、四三八上堂では「古来学仏法之人、或独居草庵、或共行精舎。独居之輩多被鬼魅魍魎侵、共行之人少被天魔波旬嬈。未明仏道之通塞、空守至愚之独居、豈非錯乎。今常在叢林之長連牀上而昼夜弁道、魔子不得嬈、鬼魅不得侵。誠是善知識、又則勝友也。」と叢林で修行することの功徳が説かれている。

建長五年（一二五三）『御遺言記録』では「然当寺依為勝地雖執思処、其又可随世随時。仏法於何地而為所行之勝地也」と伽藍の有無に関わらない弁道を重んじる姿勢を再確認出来る。

以上、道元禅師における伽藍観の変化の有無を年次順に探ってみた結果、道元禅師はその初期においても伽藍建立を否定したのではないこと、大仏寺造営の前後においても伽藍建立に対する見解に変化が見られなかったことが確認出来た。

では何故変わったように見えたのか。紙幅の関係からここでは具体的に用例を示すことは出来ないが、基本的に伊藤氏（注3）の解釈が妥当であると考えられる。

道元禅師は、どのような環境においても、仏道を行じることの重要さを説示されたのであり、道元禅師の否定・批判した造像起塔（伽藍建立）とは、修行なき伽藍仏教・名聞利養による伽藍の建立・装飾等なのである。

つまり、道元禅師における伽藍とは、正伝の仏法を実現する場所であり、正伝の仏法を伝えていくための伽藍整備は必要であるという立場は終始一貫していたと思われる。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

道元禅師における伽藍建立の意義（西　澤）

1　「大仏寺建立を成就せんがためには『発無上心』における如き説き方も必要であったろう。（中略）造像起塔に関する見方も徐々に変わっていったという事情があったのではなかろうか。すなわち、興聖寺時代はまだ仏法弘通の態度が必ずしも確立せず、したがって堂塔伽藍を必要とする度が弱かったのに比べ、越前移錫後は、この深山の道場を拠点として仏法を弘通せんとの決意の断乎たるものがあり、したがって堂塔伽藍も必要不可欠となってきた。」（杉尾守「道元の哲学（上）」、『山口大学教育学部研究論叢　人文科学　社会科学』第一九巻第一部、一九七〇年三月、一一七頁）

2　「（伽藍建立を宗教的たてまえとして）寛元二年（一二四四）大仏寺建立途上の道元は、「而今の造塔造仏等は、まさしく発菩提心なり」（『正法眼蔵発菩提心』）と、その事業を深い宗教的意義において論じたが、これより二年前深草興聖寺にいた時と、これより二年後大仏寺を永平寺と改称した後にはまったく逆の論調をみせている。（菅原昭英「道元の勧進について―観音導利院僧堂勧進疏の史料価値」（『道元思想体系』三　伝記篇第三巻―道元の生涯三―、高橋秀栄編、同朋舎出版、一九九五年七月、一三五頁）、「「造塔造仏」を発菩提心だと推賞する、大仏寺建立に合わせた単なる叱咤激励の文章のような感を呈する」（袴谷憲昭『本覚思想批判』、大蔵出版、一九八九年七月、四〇六頁）

3　「『随聞記』では、「真の仏法興隆」とは、仏法を行じることにあるのであって、造像起塔にあるのではないことを出家者に向かって説かれたものであるのに対し、『発無上心』の巻では、いろいろな事が発菩提心の因縁であることを説く中で、造像起塔も発菩提心となることを説いているのである。同じ「造像起塔」という語であるが、全く異なるテーマのもとに用いられるのであって、何ら矛盾しないし、禅師の「造像起塔」に対する考えに変化があったわけではない。」（伊藤秀憲「道元禅と『随聞記』」、池田魯参編『正法眼蔵随聞記の研究』渓水社、一九八九年五月、一一七頁）

4　「道元にとっては、仏像堂塔の類は真理への道に何の益するところもない。」（和辻哲郎「沙門道元」（『近代日本思想大系』二五　和辻哲郎集　筑摩書房、一九七四年五月、四五頁）、「道元が本来理想とした出家の生活は（中略）草庵・樹下を求めて修禅に励む行雲流水の生活であったが、（中略）正伝の仏法を実践し布教する場は、行雲流水・一処不定の僧団の生活の中にではなくて、集団定住の僧団の生活の中に落ち着かざるをえなかったのである。」（竹内道雄「初期僧団の展開―教団」（『道元禅の歴史』第二巻、春秋社、一九八〇年二月、四～五頁）、「道元は南宋五山の壮麗な伽藍を豊屋として疑問視し、簡素を旨として白屋をよしとし、樹下露地の経行や草庵を尚んだ。」（関口欣也「道元禅師が記した南宋大禅院の伽藍」『駒澤大学禅研究所年報第七号、一九九六年三月、九〇頁）

〈キーワード〉　道元、伽藍、造像起塔、『正法眼蔵』

（駒澤大学大学院）

NII-Electronic Library Service